

我を見つめて

魂の尊嚴

甲「小さいことに泣いたり笑ったりしている私どもが、時にはたまらなくみすばらしく見えることがあります。考えることが何だ、苦しむことが何だ、と思うことがあります。今も私の心は灰色です。私はたまらなく淋しく、卑しいつまらぬものに見えます。これは私の何時も作る妄想かも知れませぬ。この妄想をやぶつてもつと大きくなりたいと思います。町を歩く自分。貧しい自分、学識のない自分、その自分を思うと穴へでも入りたいほどであります。」

乙「社会のすべてに呪わしい気分を送つて、冬の日の底冷えのする曇つた夕暮のような沈んだ心で、何をするにも輝きも嬉しきもない。それでいてその心を何かに当り散らすほどの元氣もなく、黙つて、沈んだ心を抱いて苦しんでいるほど、苦しいことはありません。」

甲「私はそうした日ばかり続くのであります。今もそれなのであります。ちつとも落着きもなく、そして何の目的も希望もないような気がします。」

乙「際も涙もない心の中の空虚……」  
甲「私にはその空虚がだんだん大きくなつて来るような気がします。何ともしようのないこの灰色の心、大きなく空虚、何を見ても、何を聞いても、どうにもなりませぬ。」

私はさつきまで友達と一緒に哲学的な議論もしていました。昨晩は芝居を見にも行きました。けれども駄目であります。この魂の底なき淋しさをどうすることも出来ませぬ。目を閉じて、じつと考えこむこともなく……私の魂は私の体をぬけてずんずんと落ちてゆきます。暗黒、たつた独り、言えない淋しき、やがて見えて来る灰色に凍つた世界、風一つ吹かず、物一つ動かず、人一人おらぬ灰色の世界、その中にたつた一人立つた自分……私の心はちょうどそれです。」

乙「それでいて、それでじつとしていられぬ心の願いがやはりはしませぬか。」  
甲「堪えられませぬ、とても堪えられませぬ。どうにかしたいと思えば思うほど私の心は暗くなります。私の友は皆、楽道家ばかりであります。富んだ家に生れた友、順当な教育を受けた友、毎日働いて相当に食つてゆける友、色々な友達は、集ると話し面白がっています。酒に浮かれています。彼等には心の空虚は無いのでしょうか。羨しい気がします。僕にも『楽道家になれ』と言つてくれます。けれどもあんな楽道家にはなれぬのです。」

乙「安つばい楽天に何の力がありますしやうぞ。安価な楽道家になつて安心しているほど情ないことはありません。私は叫びたい。人間を安価な楽天から覚めさせてやりたい。」

おゝその楽天に何の力があり光がある。その楽天の根柢は何処だ。正義がかくれ  
て邪悪が勝つても笑つておれ、義人が倒れて悪魔が勝つても笑つておれ、自分の恩人

を袋叩きにするほどの暴虐が行われても楽天家であれ、日本の将来にどんな恐しいダ  
イナマイトを装置されても、汝の今日一日が安価な平和なら笑っていられる楽天家。  
恥をかかされても一向奮発しない楽天家、更に更に恐ろしい楽天家は、自分の魂の内  
なる声を一度も聞いたことのない人間だ。

汝の目は常に外に向いて一度も内に向けられない。ズンガラな自分の頭よりも自  
分の美しい家に目が向く。魂の内なる声を聞くよりも、如何にして魂の声をゴマ化し  
てズンガラな自分に心と体の衣裳を打ちかけたいことに腐心せる者、おお、哀れなる  
友よ。君は、自分自身の内に三千年来全ての聖人君子によつて撞かれた鐘の響が、そ  
のまま鳴っていることに気はつかないか。『カーンカーンカーン』その鐘の響きがお  
ん身の心の耳には聞えぬか。

安値なる楽天より覚めよ。安値なる安心から覚めよ。」

甲「安価な楽天より覚めて、灰色な世界に立った自分はより更に不幸であります。  
私の強いてするこの作れるセセラ笑いの如何に淋しいかを見て下さい。私はせめて、  
安価なるにもせよ、昔の楽天に帰りたいという気さえいたします。私の内には、聖者  
の鐘の音も聞えませぬ。美しく描いていた理想も希望も、夢のように消えました。言  
うようなき悪魔の声で充ちています。八万四千と言われた悪魔の軍勢が剣を取り、弓  
をならして互いに戦っています。光さえ見えぬ灰色の天地に。私は苦しいのです。  
このままの私を抱いて、ただ訳もなく生存を続けることは、この上なき苦しいこと  
であります。」

乙「私はその苦しみに浅薄な解決を与えようとしたくない。苦しい者は苦しむがよ  
い。泣きたい者は泣くがよい。

私は微笑する。覚めたあなたの生命の自然なる成長をじつと見ていたい。私はあ  
なたのずつと底からつき出す一つの力を信じたい。あなたが生きているのなら、何  
にも妥協しないで、内からほとぼり出る力に自由を与えるならば、あなたはそこに  
とどまることが出来ないことを知っています。」

甲「私の内から突き出す力、つき出す力、私はその力を認めています。この灰色な  
淋しい魂の有様から、突き進め！ 八万四千の悪魔との惨憺たる戦いに魂の広野をお  
かされては駄目だ。私の魂はこの灰色からのがれて何かを得ようと強く強く働  
いています。否、私をあせらします。けれどもあせればあせるほど益々わからなくな  
ります。私はもうこの苦しきから一步も出ることは出来ぬのであります。と言つて  
私はここにとどまることも出来ぬのです。もちろん後にふりかえることはなおさら  
出来ませぬ。私は全く行きづまったのです。ああこの魂の空虚。ああこの言いよう  
なき魂の淋しき。」

乙「光はあなたの過去から来ない。」

甲「え！ 私はあなたのその権威者の如き宣言……………光はあなたの過去から来な  
い？」

乙「光はあなたの外から来ない。」

甲「え！ 私はあなたの力強い宣言に驚異します。………光はあなたの外から来ない？ 私の内にどうして光がありましようぞ。私の魂一ぱいはおそろしい空虚と暗黒ではありませんか。地獄………」

乙「地獄！ 地獄です。その空虚と暗黒と迷いと、氷のような冷たさとそのまま地獄です。そしてその地獄は永遠に続きます。」

甲「魂たった一つを相手にして、自分の魂にのぞきこんだ者にとつては、魂が永遠に流れて消えぬことはあまりに、はつきりしすぎたことです。私はこの迷いのまま永劫の地獄ですか。」

乙「永劫の地獄！」

甲「永劫の地獄！」

乙「その永劫の地獄に落ちたまへ。」

甲「いやです。どうかして救われねば。如何にもしてこれをきりぬけねば。悪魔の戦場を静めねば。」

乙「それをしようとなさるか。可憐にも。静めようとするそのはからいすらも亦あなたをより暗さに引きこみます。静めようとするのは押さえておこうとするのです。押さえても包んでも、そのままがやはり地獄行きです。」

甲「どうすればいいのです。」

乙「そのまま苦しみなさい。」

甲「それでも落ちます。」

乙「落ちなさい。」

甲「落ちたらどうなります。」

乙「いいから落ちきりなさい。落ちきった境地はもつと暗黒かも知れぬ。けれども、徹底なさい。徹底する者にのみ何かは与えられます。」

甲「ああ私はどうにも出来ぬのですか。」

乙「三定死の行づまりと申します。行くも死です。かえるも死、とどまるも死です。死です。地獄です。地獄です。死です。」

甲「頼るべき仏もなく、祈るべき神もない。私は要するに独去独来なのか。このまま永劫の彼方に歩むことなのか。永遠の亡者！ とは我がことだったのか。救う仏もなく、頼る神もなく、私はついにたった一人だったのか。」

乙「……………」

甲「私の過去は苦しかった。あらゆる苦しきの中に生きて来た。財産、名譽、地位、そんなものから目がいつしか自分の内に向かつて来たのだ。そうしてこの魂の内なる空虚は、金でも埋められぬ、知識でも埋められぬ、親の慈悲も足らぬ。されど、私は私のこの何でも埋められぬおそろい魂の暗黒がどこから来たかそれを知りたい、社会の罪か、神の仕業か、私の運命か。」

乙「誰の仕業でもない。ただ、自ら播いたものは自らに返る。自分のしたこと全責任が、自分に返っただけだ。」

甲「うーん。この魂の暗黒を作ったものは何人でもなく、ただ私なのか。私の全責任であったのか。私の全責任であったのか。」

乙「おゝ全責任を荷負つて立つ者よ！ その眼は輝く。君は泣いているか。」

甲「私は私の過去が次々と転回して見えて来る。この私は私の過去が作ったのだ。」

乙「君の全責任だ！」

甲「考えたこと、見たこと、言ったこと、した事、あまりに恐ろしい。自分のこの醜さも、社会国家の醜さも、全人類の血みどろの争闘も、皆、この私の醜さ、汚さをおいては無いのだ。」

乙「おゝ大きなその自覚よ！」

甲「地獄一定、必墮無間、極重悪人、私一人に呼びかけられる声だったのか！」

乙「絶望！」

甲「絶望！」

乙「静かに…………… 静かに…………… 内なる声…………… 静かに、内なる声……………」

甲「この私はどうなるのです。この私はどうなるのです。」

乙「…………… 南無阿弥陀仏々々々々……………」

甲「どうすれはいいのです。絶対絶命、死ぬることも出来ず、生きていることも苦しい。この私がかたならぬ以上、国家も家も、道徳も法律も学問もありませぬ。ただ苦しい私の…………… ああ……………」

乙「…………… 南無阿弥陀仏……………」

甲「あなたも苦しんだと言います。それがどうして今のその魂の底からの微笑が生れたのですか……………」 (泣く)

乙「そのままが救われるのです。」

甲「このままが救われる！ このままが！」

乙「三世十方、時間と空間とを貫いて、救いは確立されています。」

全ての存在、あらゆる現象の内に流れたもう光明は、あなたの内にもしみついています。

あなたはその光に育てられました。そうして今の如く奮い立つあなたに生れました。

尽十方無碍光如来。偉なる哉、不可思議なる哉。

その苦悩の内にも、苦悩にくたばることなく、よく精進突破せんとする力は、如来廻向の力であります。

光は慈悲であります。

光は智慧であります。

光はあなたを今日まで突き出した力であります。人格の根本実在であります。

光は智慧なるが故に、その久遠本性のあなたを見ることが出来ます。地獄行きと知ることが出来ました。罪の塊、貪欲、瞋恚、愚痴の三毒の塊であります。無明業体であります。どうにもならぬ自性、それが照し出されたのであります。

けれども光は慈悲であります。その罪の根源に向つて突入して来ます。

そのままを救います。「我爾を救う」の声の主体であります。

そこに信仰が生れます。

そこに衆生悉く仏性ありとの断案が下されます。

この智慧と慈悲とに当面出来る者は、ただ、自分の全責任を負うて墮ちてゆく人のみであります。

甲「……………」

乙「必墮無間！ 地獄一定！ と絶望のうめき声をあげた私は、そこに突つ立ち上つたのです。……………」

甲「おゝ…………… あなたのその眼の輝き…………… その涙…………… その涙の根源…………… ああ、私はこのままでこのままで救われているのですか…………… 南無阿彌陀仏……………」

乙『弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもいたつ心のおこる時、すなはち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。』南無阿彌陀仏と称えない先に、即得往生であります。仏果に至る不退の行者とならせてもらったのです。

頭を上げて下さい。そしてあの本尊を拜んで下さい。」

甲「ああ、み仏様！」

乙「拝めましたか。単なる偶像ではありません。あなたの内にひらめき輝いた、救いの声の表象であります。写真であります。木像を通して魂は絶対安養界に流通します。」

甲「何にも申すまい。充されました。魂一ぱいに満ち充ちて下さいました。私は今日までこの救いの主が私の人格の根本だろうとは思いませんでした。私はこの5力に動かされ、この力に育てられました。ああ偉きなるこの救いの大事実。金剛の大安心。」

乙「如来廻向の真心であります。」

『信心よろこぶそのひとを 如来とひとしときたまう』

大信心は仏性なり 仏性すなはち如来なり』(和讃)

その大信心こそ三世十方をつらぬきます。その大信心こそ仏性の顕現であり、仏性は即ち如来であります。

『無明の大夜をあはれみて 法身の光輪きはもなく』

無碍光仏としめしてぞ 安養界に影現する』(和讃)

絶対界の妙現象は善巧方便して、かく罪にやつれし我等を易行の大道によつて救わんとて、無碍光仏即ち阿彌陀如来となつて、安養浄土に現れたのであります。」

甲「私には全ての理論はもういりませぬ。ただ私は、充された歓びと、ふるい立つ力に充されてあります。ただ感謝のみであります。」

突立ち上る弾力

もし人がほんとに目覚めたというならば、それはただ、自分の内に力を認めたということである。

逆境に出会つてもしそこでくたばるなれば、逆境はその人を殺したのである。人生のあらゆる不幸に出会いながらも、もしその人が生きた魂によみがえるならば、どんな苦しい中にも奮い立つであらう。

弾力。生竹を曲げると、手の力に抵抗して引き返す。ゴム毯をたたきつけると飛びあがる。

獅子の子は千丈の谷底からはい上がる。

死んだか。生きているか。もし生きていなければ、如何なる時にも突つ立ち上つて、突進、又突進。

病。老。死。みんな、あらゆる苦悶を突き破つて真一文字に歩み得るもの、それが信仰である。

救済とか信仰とか、それは苦惱、絶望のどん底に自己を見つめた者が、如来大悲の慈涙に生きかえるのである。どん底に突つ立ち上る大威力を与えられたのである。

天下滔々として信仰に眠れる者、救済の甘味に酔うて、自己の真実を忘れたる者の何ぞ多き。

絶対真如界の現象として表されたる信仰、宗教なるものももし、人を無責任にし、人を遊惰者にし、眠らすならば、それは決して真如界の活現象ではなくて、そこには、人間の虚偽が雑つているのである。

第一、如来の救済は、自分の全責任を負うて立つ者が体験し得るか。

第二、如来の救済は、極楽往生がしたいとソロバンを持つ者が知り得るか。

ここにその根本の全く違つた二つの出発点がある。

もし第二であるならば

もし真宗信仰が第二から出発するものであるならば、私は真宗そのものの存在を呪う。放蕩息子が自分の散財から出来た借金を親に払わすような、ずるい恩を売る考え、ソロバン根性から出発するものならば、その信仰は人間をずるい無責任の者としてしまう。私はかかる宗教の存在を認めない。一家はこの腐つた根性によつて衰える。一国はこの無責任な人間によつてつき崩される。

お大師さんを信じて一家の繁盛を希つたり、不正直なずるい商売人が神棚の前に柏手を打つのと何等変つたことはない。それは単なる迷いの現世祈祷と五十歩百歩である。今日の信仰界の現状にこの有様はないか。説く者の罪になるか。聴く者の罪か、そもそも何者の罪か。

真宗は、悟りへの易行の大道、行い易き大道である。

「円融至徳の嘉号は（南無阿弥陀仏のこと）悪を転じて徳をなす正智、難信金剛の信楽は、うたがひをのぞき證をえしむる真理なり。しかれば凡小修し易き真教、愚鈍ゆき易き捷徑なり。大聖一代の教、この徳海にしくはなし。穢を捨て浄をねがひ、行にまよひ信にまどひ、心くらく識すくなく、悪おもくきはりおほきもの、ことに如来の発遣をあふぎ、かならず最勝の直道に帰して、もつぱらこの行につかへ、ただこの信をあがめよ。」（本典総序）

人間から仏へ、迷いから覚りへ、即ち大聖釈迦が教えられたあらゆる道の内で、弥陀の本願に乗托することは、

一番勝れた道である。

一番易き道である。

一番勝れた道だから、聖人様は

「大聖二代の教、この徳海にしくはなし。」

とおほめ遊ばしたのである。

一番もやすい道だから、

「しかれば凡小修しやすき真教（真実の教）愚鈍ゆきやすき捷徑なり。」

と教え遊ばしたのである。

大聖釈迦如来と同一の覚りに入ろうとする者に、何で功利的なソロバン根性がゆるされようぞ。

一番手近かな自分、その自分をばちつとも知らずに、見ようともせず、手を長く十萬億土にさしのべて、極楽往生をつかもうとするような、そんな狡猾な根性で何で如来への道が開かれようぞ、全てのはからいを棄てよとは、このずるい考えを棄てよとのことである。

しかるに今の念仏行者中、何人か真実の信仰に生き得たる者があろう。単なる空想的享樂ではないか、現実の世界、今日一日の生活に何の交渉がある。念仏によつて掘り下げられたるどれだけの深い世界がある。

7

甲「先生。私は残念なのです。私は馬鹿なのです。馬鹿正直なのです。私は他人を信じます。他人を信じてお金を貸しました。借りた彼はもう三年にもなるのに利子一文くれなければ、払おうともしないのです。それに近頃は、私を散々悪く言うのです。私は楽しみませぬ。しょせん人生は馬鹿正直な者が敗けるのです。」

乙「法兄は魂を、否、法兄自身を愛しますか、金を愛しますか。」

甲「金よりも、私自身を愛します。」

乙「法兄が貸したお金参百円はどうして得ましたか。」

甲「私は汗によつて稼ぎ出したものであります。」

乙「法兄は金を棄てても、金以上のものを得る場合のあることを知っていますか。人間は何かを得ることによつて、それ以上のあるものを失う場合のあることを知っていますか。あるものを失つても、それ以上のあるものを得る場合のあることを信じますか。」

甲「わかりませぬ。」

乙「それでは法兄は、その苦勞によつて得たる数百円の金を何にしようと思ひましたか。」

甲「商業の資本にしようと思ひました。」

乙「あなたは何がほんとの資本だと思ひますか。」

甲「金が商業の資本であります。」

乙「違います。根本の間違いです。」

甲「それでは何が資本でありますか。」

乙「その数百円を汗によつて貯えた、その法兄の精神が何よりの資本です。出来た数百円はそれは汗によつて出来た粕であります。数百円を失つても、失わない目に見えざる大資本は、一滴々々の汗の滴と共に、法兄の内に貯えられてあります。」

甲「ああそうですか。私は一向気づきませんでした。それにしても、払つてくれない数百円も欲しいでございます。」

乙「払つてもらいたいののもつともです。けれども、その借りて払わない人間の哀れさを知つてやらねばなりません。彼はその法兄の大資本から流れ出た粕を借りて返さぬことによつて、大きな失いものがあります。彼は彼の内に大変な失い物をしてします。」

甲「何故でしょうか。」

乙「ここにお金落ちてゐる。それを見つけたものがある。そして内緒で懐に入れたとします。彼は、その金を取つたことによつて、彼の内からある尊いものの失われていることを知りません。そのために彼の大資本、大田地は小さくなつて来ています。彼にはたとえ数十万円の大資本を持たせて商業させても駄目であります。」

甲「よくわかりました。つまり精神のみが大資本だと言われますか。」

乙「法兄はたとえ、その数百円を失つたとて法兄の内なる、真実なる大資本は一厘一銭も失われていませぬ。御安心なさい。」

人は皆、この内なる大資本の充実につとめねばなりません。

しかるに今の時代全ての人は、この単純なる道理に暗いのです。そうして誰も皆、外に外にと求めます。

内なる力に外は自然とついて来ます。内なる資本にさえ富んでいなければ、毎年、盗難や火事にあうとも、法兄の前途には光明があります。

外に積まれたものは、失われて行きます。」

甲「何だか心が広くなりました。私は何かしらもつと考えさせられる気がします。」

乙「人に疑われてもいいから、人をば疑わぬことであります。」

疑われた者は一厘半銭の損もありませぬが、疑つた者はそれだけ魂をすりへらしてします。心の傷を造つています。

欺かれてもいい、信ずることあります。欺いたものは精神の輝きが曇つて来ます。信じ得る者はそれだけ広い世界に住んでいます。

賢い大將は全て幾万の部下を信ずることが出来ました。

自分の夫をさえ疑わねばおかぬほどの妻は、極く小さい蟻のような魂しか持たぬ人でありませぬ。

私は万人皆を信じ得る域まで進みたいと思ひます。」

甲「信ずる者は信じられます。信ずるところに安心立命があります。人格の向上とは信の世界の拡大されることではありませんまいか。」



乙「全ての出发点は自分でありませぬ。自分さえ自分を忘れなければ、何もおそれることはありません。人は皆、自分を忘れて外に外にと築きあげてゆこうとします。外に向う目を内に向けなくてはなりません。」

釈迦の「我は世尊なり如来なり。」との自覚はすぐ「三界の衆生は我が子なり。」との強い慈悲の宣言となった。

釈迦一人の救済は万人皆の救済であつた。法蔵菩薩の如来なりとの正覚は、すぐ一切衆生の往生の定まる時であつた。私は深くお慈悲を味わつて確信し教えられる。

我一人の救済は万人の救済である。

私が一人が救われたことは即ち万人の救われたことである。

仏になることは、自覚することである。迷いなき、絶対の真理の体得者となることである。と同時に、仏とは覺他の慈悲に何の雑物のない全く一切衆生の親として誕生することである。

だから重ねて言う。我一人の救済は万人の救済である。

だから救われるとは、単に極樂に参つて楽しむなどの凡夫相對の根性の満足ではない。

一切衆生を救う大運動に参加することである。

一切衆生をして仏にまで向上せしむる大使命に生きはじめることである。

大使命の自覚はすぐ、我が本願の自覚である。

救われたとは、この大使命に立つことである。本願に生きることである。

念仏の子は菩薩と同位であり、一步の退転なく仏へ仏へと進みつつある自覚、覺他の大行に生ききる人である。大使命を負うて、大運動参加の勇士である。彼等は一見貧困なるが如きも、地上の宝のみ持てる者には知ることの出来ざる大福田を、彼の内に蔵しまっている。

彼等は時に如何なる苦にも遭遇する。けれども苦しみつつも、へこたれ、くたばらない。どんな時にも突立ち上つて猛進する。

彼等は、大地の上を一步／＼と踏みしめて、自信と權威を持つて歩む。

彼等は、彼等の生命の熱愛者である。自ら信ずる道には、他のいらざる言葉にも迫害にも見向きもせず、本願に生きる。彼等は命をとられても厭われない。

彼等は最も魂の熱愛者であるから、物質の前に頭を下げて拝んだり、物質の奴隷になつたりすることが大嫌いである。

彼等は信仰一元の人である。信仰の外に善もなければ、道徳もない。

彼等は最高至尊の義務を果す人たちであるから、願わざるに、諸神、諸仏、菩薩に護られて、無碍の大道を闊歩する。

なんでもかんでも

そのおびおびして、何でも結果を思いわずらつて足踏みする弱さから、一步ぬき出ようではないか。

薄紙のように何かしら一枚かかっている、あの弱々しい邪魔物を取り去って、うんと強く立つのではないか。立つて、そうしてなんでもかでも、善いと信じたことを実行しようじゃないか。燃え立つ生命の前には何物の障碍もあり得ない。こうすれば、悪く言われる、こうすれば損になる、こうすれば病気になる、こうすれば人が相手にしないなどと、尻込みばかりしている間に時は過ぎてゆく。なんでもかでもやっつて行くのではないか。

強い念願の前には何かの実行が生まれる。

生一本。私は生一本が好きだ。何でも生一本に進む人にのみ道が開かれる。

あれに気をとられ、それに心を奪われて、グズグズする者は、魂のない亡者である。亡者ばかりが物質に走り、名利に走り、死をおそれ、社会をおそれ、人をおそれ、根無し草のような風のまにまにふらつく。

現代政治家中の世界的政治家、英国のロイド・ジョージは世界の隅々にまでその名を知られた。世界戦争のすんだ時、世界の大勢はその掌中に握られていると言ってもいい位であつた。彼は真に偉い。

かつて彼が代議士であつた頃、英国は、南アフリカ、トランスパールの金鉱を護るために、ブーア人を相手にして、無名の師をおこした。ロイド・ジョージは、強きを抑え、弱きを扶けるといふ義侠の血の流れている男である。弱気ブーア人を相手にして、英国の貪欲の悪魔の手を振うのを、何で見ていることが出来ようぞ。かかる非人道的な戦をおこすことには、愛する祖国だとして黙することは出来ない。戦争熱におかされて全英国の血の湧いている時、彼はその真只中に立つて叫んだ。あらゆる反対、迫害、攻撃の中に立つて、非戦運動を始めた。至る所の演説会で彼は「戦つてはならぬ」と叫びつづけた。「売国奴！ 非国民！」と罵られても、妨げられても止めなかつた。彼は真の愛国者であつた。大英帝国を真に愛したのだ。

かく弱き者のために叫んだそのままのロイド・ジョージが、あの華々しい宰相である。彼は生一本に生きた人である。生ききつた人である。

自分の生命の上に至上の権威をもたせた人である。

何でもかでも、色彩はつきりとすぐ実行に取りかかろうではないか。実行に現れただけが我がものである。

如何に深遠な思想を持つていても、それが実際に現れて来ない時、何の役にも立たぬ。如何に高尚な学説が学者によつて叫ばれても、それを實際化する民衆がなかつたら何にもならぬ空論におわるではないか。

我々は實際家である。凡人である。

実行者である。何でもかでもやつつける実行者である。

生一本に実行せよ。

生一本に叫べ。

悪かつたら悪かつたと謝る。よいと信じたら誰が何と言つても実行する。間違いだと知つたら何時でも訂正する。

正しいと信じ、よいと信じたら何もはばからず声高く叫ぶ。

私は無宗教の日本国民を見て、とてもじつとしていられない。

高尚な宗教を知らずに、低扱きわまる現世祈祷に墮落している、無智な、哀れな人たちが気の毒でたまらない。

ずいぶんと学識あり、見識ある人たちの内にも、まだ真実の何であるかを知らないで、愚夫愚婦が、蚊のなくような声で、お浄土参りを願っている老人だましの宗教だ、と思われていることが残念でたまらぬ。

目覚めた精神界の第一線に立つ人たちから、現在の安芸門徒を駄目だと言われる。まことによく気をつけると、長い春の日の雞のあくびのような、だれ気分と、閑だらけの有様が見える。私もいわゆる安芸門徒の一員ではないか。眠っていると言われる安芸徒をどうにかしたい。うんと緊張させて安芸門徒の権威を示したい。

こんな色々な目的を果すために、何でも棄ててかかるほどの人格者と手が握りた。真実の信仰は生きた人たちと一人でもたくさん提携したい。そうしてこの混沌濁乱の社会に猛進したい。

そんな心配はいらぬことだと、高くとまつていなさる聖人君子に用事はない。俺だけが極楽に参れたらそれでいい、というような小乗的な、利己的な人たちにも用事はない。真に人類を考え、国家を思う人たちは、その立場々々でじつとしてはいられない。現代を救う。まず自己が救われねばならぬ。そうして救われた者がじつとしていられないのはもちろんのことである。

私は非難攻撃に充ちた男である。けれども、大人格の免状をくれるところもなければ、これなら合格、活動してもいいという卒業証書をくれるところもない。ただ、叫びたいから叫ぶ、読んで下さらなければそれまでである。したいからするのである。そうして日々に修了し、月月に卒業する。念願への猛進は私自身の完成である。

宗の前途を憂い、国家の将来を思い、人心の趣く所を歎く者は、悉くこの運動に参加してもらいたい。どんな学者が、どんな宗教家が来て、私たちを導き、団を提げて立つて下さっても、どんなおばあさんでもいい。どしどし一緒に歩む。私は切にお願ひし、お奨めする。法兄法姉の毎日接する人、お友達、誰でもいい、強い念願を持つてゆりおこして下さい。何でも為になる話をしてあげなさい。信仰の話をしてあげなさい。立派な方の講演や説教に誘い出してあげなさい。聞いた話を又聞かせてあげなさい。『光明』を誰にでも見せてお上げ下さい。

高ぶらず、おそれず、嫌味のない気持ちよい実行家。

そこに凡人向上の第一歩があるのであるのではあるまいか。

念仏の子は妙好人ではないか。

如来の光明はただ、私のこの煩惱を舞台にしてのみ、活躍するのだ。

一本の草、それは大地の血を吸い取って成長する。

私たちは、如来五劫永劫の血潮がこの我の内を流れることによつて生き、育つ。

如来も、ただ我々を通して輝く外に、輝きようがないではないか。

念仏の子は安養浄土から生えぬいた華である。

権威を持つて立てるのではないか。

猿と兎と狐とが三人で美しい助け合いの日暮しをしていました。久方の月のご殿の帝はこれを聞こし召して、白髪の翁になって三人のところに行きました。そして食に飢えていることを言つて助けを求めました。

「猿は後の林より、木の実を拾つて来りけり。

狐は前の川原より、魚をくわえて与えけり。

兎はあたり跳びとべど、何もものせでありければ……………」

兎は翁に与えようにも何もありませんでした。彼はついに、猿の刈りて来た柴を積みあげて、火をたき、狐に頼んで自分の身体を焼いてもらつてそれを翁にささげました。翁はただ感謝して天に仰いで泣きました。そうして兎の骸を抱えて久方の月の宮に投げ上げました。兎は今、月の宮居でお餅をついています。

猿の智慧も持たず、狐のような働きもない兎は、どうしていいか為す術がなかった。けれども行きづまった彼は、彼自身を投げ出して翁に与えた。

徳もない、智慧もない、分別もつかず、困つた者には、最後に彼自身をなげ出すという血路がある。

自分自身をなげ出す時、そこに始めて絶対自由の世界が開かれる。

人生は厳粛である。

厳粛に歩まうとする者は、自分の全てに絶望を知る。

絶望の極、自分自身を投げ出す者にのみ、無条件の救いは我がものとなる。

我を見つめて生きて行く者のみ、人生の意義もあり、価値もある。信仰は自己を見つめる人の胸から生れる。